田村市
都路町頭ノ巣
集落調査
報告書

福島大学経済経営学類
藤原遥ゼミナール

2020年度
大学生の力を活用した集落復興支援事業

はしがき

東日本大震災にともなって発生した東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、福島原発事故）からまもなく10年を迎える。被災地域においては、インフラ復旧は進みつつあるものの、自然資源に依拠した暮らしや生業、そのなかで成り立つコミュニティへの影響は大きく、それらの再建にいまだ多くの課題を抱えている地域が少なくない。なかでも、農山村地域にあたる阿武隈地域では、以前に直面していた少子高齢化、人口減少、および農業の停滞などの課題が放射能汚染によってより一層加速化、深刻化し、それは顕著である。

本ゼミは、阿武隈地域に位置する田村市都路町（以下、都路）に着目して、自然資源に依拠した生業や暮らし、コミュニティにおける歴史や被害実態の把握につとめるとともに、住民の方々とともにその再建のあり方について検討を重ねてきた。

都路は、福島原発事故前までは国内有数のシイタケ原木生産地であり、広大な面積の広葉樹林が利用され、維持されてきた地域であった。広葉樹は、生業になるのみならず、キノコや山菜など多様な山の恵みをもたらして住民の暮らしを支えてきた。2019年度は、このような山の生業と暮らしをテーマに調査を行ってきた。

2020年度からは、福島県企画調整部地域振興課「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の助成金を受けて、1 年目の調査でお世話になった方との縁で「頭ノ巣」という集落に焦点をあてて調査をおこなった。頭ノ巣は、一本の道路沿いに27戸の民家が連なる小さな集落である。阿武隈地域特有のなだらかな山並みに、田畑が広がり、豊かな自然環境の中にある。自然資源を活かし、農林業を主要な生業としてきた。血縁関係のある方が多く住んでいることから、相互扶助の意識や、連帯感が高い地域である。本調査の受け入れにあたり、頭ノ巣では、集落の役員および班長などによって構成される地域づくりを考える実行委員会が発足された。実行委員会の協力で調査を実現できた。

本報告書は、これまでの調査結果をまとめたものである。現地では聞き取り調査をおこなってデータを収集し、そのデータはKJ法を使って整理をした。聞き取り調査には、全人口58名のうち半数以上の方々に協力をいただいた。わずか2回の調査では十分に状況を把握することができず、分析についても至らないところは多々あると思うが、本報告書が実行委員会を中心に地域づくりを考えていく際の材料の一つになれば幸いである。

実行委員会は2021年1月に「ひと葉の風」という名称をつけ、実践的な活動に取り組むことを決めた。その名には「一枚の葉が起こせる風は小さくとも、みな合わせれば大きくなる」という意味を込めている。実行委員は2020年11月に発足し、発足記念として、頭ノ巣のシンボルであるイチョウの木のライトアップをした。そのイチョウの葉から連想して生まれた名前である。藤原遥ゼミも一枚一枚の葉となり、今吹きつつある風の一部となって、頭ノ巣の活動に関わっていきたい。

そして、その風は、頭ノ巣を良い方向に導くだけではなく、学生たちを成長させることにもつながるであろう。調査を通じて、学生たちは多くのことを教わり、刺激も受けてきた。調査後の感想文に目を通すたびに、学生の成長を感じている。

本調査の実施にあたって多大なるご支援・ご協力をいただいた頭ノ巣の住民の方々、そして福島県地域振興課に心より感謝を申し上げるとともに、今後ともご教授を賜りますようお願い申し上げる次第である。

藤原　遥（ゼミ担当教員）

田村市都路町頭ノ巣集落調査報告

目次

はじめに…… 1

1.　都路の概要…… 3

2.　頭ノ巣の概要…… 6

3.　集落の調査結果……11

4.　まとめと考察……16

おわりに……21

10 月 31 日に実施したイチョウの木ライトアップ

表紙デザイン　　小林　卓
裏表紙デザイン　加藤　黎

はじめに

本調査は、藤原遥ゼミの2年生10名を中心に実施した。学生全員が、今回の調査において、はじめて頭ノ巣を訪問することになった。今年度の調査では、都路および頭ノ巣の実態を把握し、その実態の中に沈潜する魅力や課題を捉えることを目的とした。

新型コロナウイルス感染拡大により、現地調査を計画通りにおこなうことはできなかったものの、県内の感染者数が相対的に少なかった10～12月にかけて2回実施することができた。調査は、下記のスケジュールでおこなった。主な活動は、集落歩き、ヒアリング、地域づくりに関する議論の3つである。

集落歩きでは、住民の方々により案内と説明をいただいて、集落全体を歩いて、地域にある資源や歴史、魅力を見つける作業をおこなった。ヒアリングでは、40代以下、50～60代、70代上に分けて、それぞれに集落の歴史と現状、魅力、課題について聞き取りをした。地域づくりに関する議論では、住民の方々と今後の活動および地域の将来像について意見交換をした。お昼には、集落のお母さん方が作ってくださった温かい料理を囲み、身体も心も温まりながら、住民の方々と交流を深めた。

スケジュール

10/31	・午前　移動 ・午後　ヒアリング 　　集落歩き
11/1	・午前　ヒアリング ・午後　地域づくりに関する議論
12/5	・午前　集落歩き(前回の続き) ・午後　地域づくりに関する議論

初回の調査では、とにかく現状を把握することに専念した。調査後には、教わったことをヒアリング記録にまとめ、KJ法を使って整理した。それと同時に、複数の文献を読んで、一般的な過疎地域が抱える課題を把握し、頭ノ巣の現状と照らし合わせて相違点を検討した。そうした作業を通じて、頭ノ巣が抱えている課題は、景観とコミュニティという概念に集約されるという考えに至った。

それからは、景観づくりとコミュニティづくりの2つのテーマを設定し、それぞれ班に分かれて研究をすることにした。ヒアリング記録からキーワードを拾い上げ、景観づくり班では主として耕作放棄地や獣害、空き家について、コミュニティ班は主として地域の人たち同士、地域外の人たちとのつながりや文化について調べることにした。キーワードに関連する情報をヒアリング記録から掘り下げ、文献調査をして次のヒアリングに備えた。

2回目の調査では、前回調査結果を模造紙にまとめて発表した。そして、前回の調査で疑問に思ったことや、深めたいことについて、ヒアリング項目をつくり、住民の方々に話を伺った。詳しく話を聞いていく中で、私たちが固定観念を抱いていたことに気がついた。私たちは集落の支援に入るからには、住民の方々は「集落をどのように発展させることができるか」を目指しているものだと思っていた。しかし、実際には住民の方々は「いかに集落を美しい状態で畳むか」という考えを持っていた。この経験を通じて、景観やコミュニティのあり方を考えるには、自分の視点だけでなく、地元の方の考え方をしっかり汲み

取っていく必要があることを実感した。

私たちはこの地域に対する知識が薄く、過疎地域が抱えている危機感や問題とは離れた生活をしている。数回の調査では、頭ノ巣の景観づくりやコミュニティづくりに対して、学生独自の提案をすることは難しい。それでも、1 回目の調査だけでは発見できなかったことを、2 回目の調査で発見することができたことも少なからずある。地域に足を運び、住民の方々に話を聞いていくことを重ねることで、地域の魅力や課題を把握することができるようになり、地域づくりを考える視点も学ぶことができた。本報告書では、地域の住民の方々、および自然から学んだことを整理してまとめた。来年度の景観づくりやコミュニティづくりに関する活動の方向性を考えるための資料となればと思う。

頭ノ巣の調査では、私たちが普段の生活ではなかなか触れることのできない地域の生活や歴史、自然について体感することができた。地域から学びながら、私たち自身も、地域が抱える課題に対して、問題解決をはかる力を磨いていきたいと考える。

佐山　大洋

1.　都路の概要

1.1 自然的・社会的条件

（1）　位置

1889 年の市町村制施行にともない、古道村と岩井沢村が合併して都路村が誕生した。この村名は、2 つの旧村を横断する街道が都へ最も近いと言われたことから名付けられた「都路街道」に由来するといわれている。その後、平成の大合併の波が全国的に押し寄せる中、2005 年 3 月に都路村を含む田村郡の 5 町村が合併し、田村市に移行した（都路村 2005）。

都路は、田村市の東部に位置し、図 1-2 ではオレンジ色に塗られている地域にあたる。都路には 12 の行政区がある。頭ノ巣は、隣接する大久保とともに、第 10 区を構成する。

（2）　地勢

都路は、福島県東部にある阿武隈高原の中央に位置し、標高 400m前後の場所にある。中核都市である郡山市まで約 25 km、浜通り地区まで約 60 kmの場所に位置している。都路の面積は 12,530ha であり、うち耕地面積は 799ha で総面積のわずか 6%である一方、森林面積は 10,204ha で 81%を占めている。

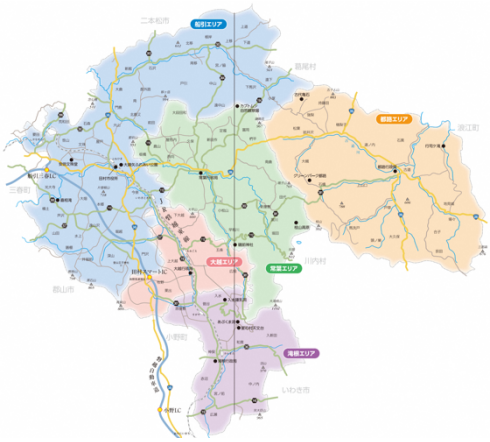

図 1-1 福島県の道路網図と田村市の位置　　図 1-2 田村市の地区別地図

出所：福島県「福島県の道路網図」より筆者作成。
（https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/41035a/map.html）
田村市「田村市市勢要覧 2018」より筆者作成。
（https://www.city.tamura.lg.jp/uploaded/attachment/18204.pdf）

（3）　交通

基幹道路は、国道 288 号線（郡山市－双葉町）および国道 399 号（山形県南陽市－いわき市）である。都路の東に位置する古道と、西側に位置する岩井沢とは生活圏が異なっていた。頭ノ巣集落を含む古道の住民は、浜通りの福島第一・第二原子力発電所が立地する大熊町、双葉町、富岡町、楢葉町などに出ることが多く、他方で岩井沢の住民は船引町や郡山市などに出ることが多かった。船引町まで約 30 分、浜通り地区まで約 40 分の距離にあり、商業施設や職場、高校などはそれらの地域に依拠していた。

（4）　農業

耕作地の多くが傾斜地であり、かつ高冷地であるため晩霜等の被害が生じやすい。そうした環境の中で、水稲を基幹作物としつつも、畜産や野菜作りを主とする複合経営が行われてきた。従来から抱えていた農業高齢化や後継者不足という課題に、福島原発事故による影響が加わって、営農再開は厳しい状況にある。福島原発事故前から耕作放棄地は存在した。2010 年度では水田面積 539ha のうち作付面積は 347ha であり、単純に計算すれば耕作放棄地は 192ha であった。福島原発事故後に、作付面積、および作付した農家の戸数は大幅に減少した。2010 年度と 2015 年度とを比較すると、作付面積は 347ha から 228ha に、戸数は 595 から 171 に減少した（横田・守友 2016）。

（5）　福島原発事故による影響

都路は、福島第一原子力発電所から 30km 圏内に位置し、事故後は全域が避難指示区域に指定され、避難を余儀なくされた。その後、2011 年 9 月には 30km 圏内の避難指示が解除され、2014 年 4 月には 20km 圏内が解除された。

原子力規制委員会が都路の 20km 圏内を対象に実施した調査結果によると、2013 年 11~12 月に実施された走行サーベイでの空間線量率は、住宅周辺の敷地や道路は 0.1～0.5μSv/h、森林は 0.2～2.2μSv/h であった。

頭ノ巣は、図 1-4 の黄色の線より東側にあたる 20km 圏内よりも西に位置し、赤い円で囲った場所にある。住宅周辺は 0.1~0.2μSv/h、森林は 0.2~0.5μSv/h であると示されている。私たちも、集落歩きの際に放射線量計を用いて、空間線量を測定した。道路の周辺は 0.07~0.2μSv/h であった。

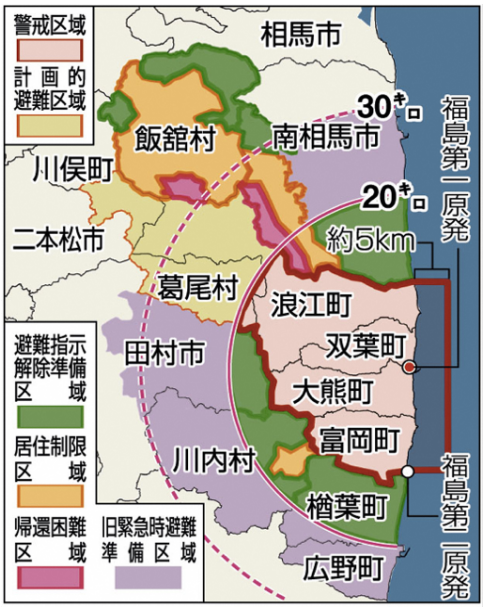

図 1-3　2012 年時点の避難指示区域

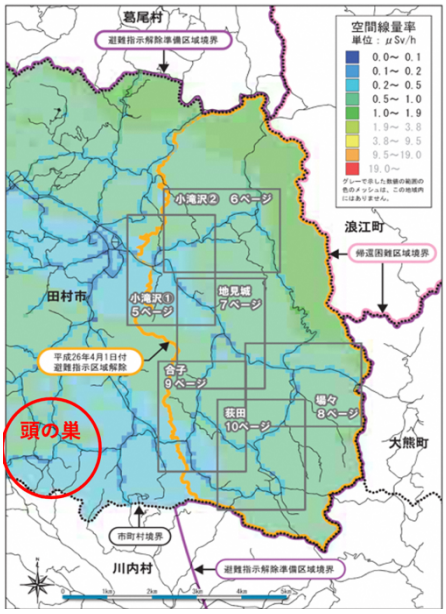

図 1-4　2013 年時点の都路の放射線量

出所：図 1-3 は『福島民報』2012 年 9 月 30 日付。
図 1-4 は、原子力規制委員会原子力規制庁「田村市都路地区放射線量等マップ」（https://radioactivity.nsr.go.jp/ja/contents/10000/9853/view.html）

（6）　人口

福島原発事故前にあたる 2011 年 2 月末時点では 2,977 人、985 世帯が居住していた。福島原発事故後、放射能汚染等の影響により人口は減少した。2019 年 7 月現在では、2,281 人、900 世帯である。単純に計算をすると、居住率は事故前の 76%である。

1.2 都路の現状と課題について

（1）　高齢者について

2019 年 7 月時点の総人口に占める 60 歳以上の割合は約 53%にまで達している。高齢化が進行する中で、高齢者福祉(特に、介護)に関する課題が深刻である。

田村市の社会福祉協議会によりデイサービス・訪問介護が行われている。ただし、つぎのような課題がある。第一に、家が点在しているため、移動時間がかかり、高齢者のケアに充てられる時間が少なくなっている。第二に、介護の働き手不足がある。その対策として田村市が資格取得の支援を行なっている。

社会福祉協議会によるサービスでは手が届かないところを支えるためには地域の福祉力を高めていくことが必要となる。都路では、隣近所や集落単位で相互扶助の関係が残っているものの、集落内の高齢化が進むにつれて、地域の福祉力が脆弱化することが憂慮される。

（2）　子どもについて

都路には、小学校と中学校が 1 つずつある。2020 年度における都路小学校、および都路中学校の生徒数は、それぞれ 43 人、33 人である。少子化に福島原発事故の影響が加わって、2011 年に比べて減少した。今後もこの生徒数は減少していくことが予想される。

（3）　移住者について

田村市都路行政局市民係の調べによると、福島原発事故前は、90 の I・U ターン世帯、52 の二地域居住世帯が村内に居住していた。田舎暮らしライターの山本一典氏によれば、都路は福島県の中で最も移住者が多かったという。都市の人が都路に惹かれた最大の理由は、広葉樹が豊富な自然環境に、よそ者を受け入れる人的関係が築かれていたことであったそうだ。しかし、福島原発事故後は転出した I・U ターン者や二地域居住者が少なくないという。都路行政局によると、90 軒の別荘が空き家となった。

引用文献

都路村役場企画課「名前は消えても、思いは消えない都路村―閉村記念誌 1990-2005」（2005 年 2 月）

横田竜司・守友裕一 (2016)「原子力災害被災地における営農再開の諸条件 - 福島県田村市都路町を事例として」『福島大学地域創造』28(1)、pp.8323-8339

藤原遥ゼミ 3 年コミュニティ班

2.　頭ノ巣の概要

2.1 自然的・社会的条件

（1）　地理について

福島原発事故以前は、浜通りの大熊町や富岡町との結びつきが強かった。買い物や仕事、高校などは浜通りの町に依拠していた。頭ノ巣は、標高 450~650m にあり、全長 8km ほどである。集落の中心には、集会所と二柱神社がある。集落には小学校はなく、隣接する大久保地区に大久保小学校が存在する。同校は 2010 年に廃校して、古道小学校に統合された（現、都路小学校）。現在、頭ノ巣に住む小学生は都路小学校に通っている。

図 2-1 頭ノ巣集落の様子　道に沿って集落があり、田んぼや山に囲まれている

（2）　人口と戸数について

頭ノ巣には、2021 年 1 月現在、58 人住んでいる。そのうち 65 歳以上は 34 人、30 代以下は 5 人、小学生は 1 人である。高齢化率は 58.6%である。将来的に集落の人口が増加することは見込めず、少子高齢化がこのまま続くとなれば、集落自体の存続が難しくなると考えられている。

頭ノ巣の戸数は 27 戸で、そのうち独居は 7 戸、空き家は 3 戸ある。血縁関係のある家が多く、相互扶助の意識や、連帯感が高い集落である。閉鎖的な印象は受けず、血縁関係がない I ターン者も集落の人と打ち解けている。私たちに対しても温かく向かい入れてくれた。移住者の受け入れにも積極的な集落である。

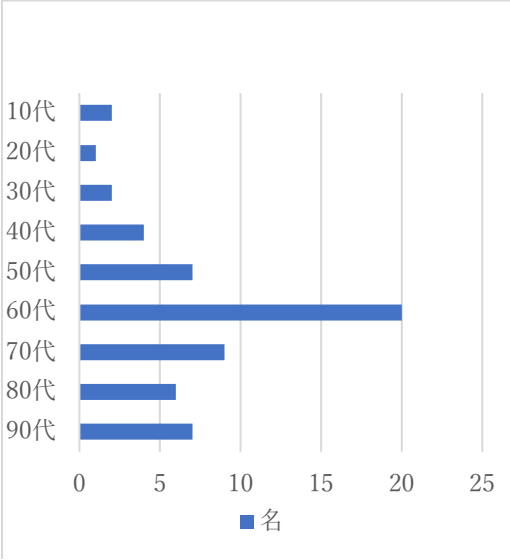

図 2-2 頭ノ巣の人口構成
出所：頭ノ巣の住民による調査

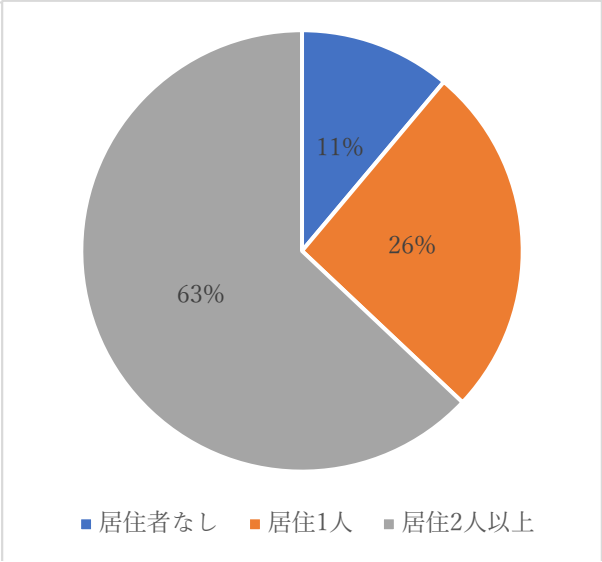

図 2-3 頭ノ巣の居住形態

（3） 生業について

農地は傾斜が多く、東北太平洋側特有のヤマセの影響を受けることもあり、耕作条件が厳しい。

戦中から昭和 60 年代半ばまでは、山からとれるナラ、クヌギの木を使い炭焼きをおこなっていた。エネルギー革命により木炭の需要が低迷すると、シイタケ原木生産に力を入れるようになった。炭焼きとして利用していたナラ、クヌギがシイタケ原木に適していた。原木シイタケは炭焼きよりも多くの付加価値を得ることができたという。シイタケ原木生産は原発事故以前まで続いたが、放射能汚染によって事故後は再開できていない。

農林業が盛んな集落であったが、木炭の需要低迷にともない、農業以外の職に就く人が増えた。一定の所得を得るために、他の地域で働き稼いだ。集団就職の時代は、関東に出稼ぎに出た。福島第一・第二原子力発電所が建設されてからは、出稼ぎに行かなくとも、都路から車で通勤することができたので、労働力が原発関連の建設業や製造業、運送業に流れた。他方で、農林業の従事者は減少した。専業農家は少ないが、主に畜産を営んでいる。兼業農家は多い。中には、新たに有機農業をはじめた人もいる。

細澤　勇生

2.2 景観

（1） 道路沿いの自然環境

集落歩きを通して、頭ノ巣の魅力と課題を知ることができた。

頭ノ巣には森林が多く、なかでも薪炭やシイタケ原木に使われてきた広葉樹が多く占める。広葉樹は、秋に紅葉し、その景観は魅力的である。私たちが 11 月に訪れたときは紅葉シーズンで、美しく、他の地域では見られない景色であった。

集会所にある大径木の乳イチョウは集会所のシンボルである。このイチョウは頭ノ巣の二柱神社入口にあり、幹が乳房のように、垂れ下がっていることから乳イチョウと呼ばれている珍しいものである。このイチョウは隣家の高橋家の祖栄蔵が、南部藩(現岩手県)に鉏鉄を仕入れに行った帰りに、記念として買ってきて植えたものと語り継がれている。植えた時期は、江戸時代文化年(西暦 1800 年)頃と言われている。10 月 31 日に訪問の際には、実行委員の方々とともに乳イチョウのライトアップをおこなった。

他にも季節ごとに景観を楽しめるように工夫がされていた。集落では中山間地域等直接支払制度を使って、道路沿いの林地に桜を植えて、桜並木街道がつくられていた。福島原発事故後には耕作放棄地が目立ってきたことから、より一層、景観づくりを意識するようになった。意識の高い住民を中心に、蓮池づくりや、田んぼの畦道にカエデなどの木を植える取り組みがされてきた。

福島原発事故後は、放射能汚染の影響と生産者の高齢化や人手不足により、里山が利用・管理されなくなり、耕作放棄地が拡大した。さらに、近年は鳥獣被害が深刻である。これらにより集落の景観は悪化した。景観対策および道路の安全確保として、最近は、住民の方がボランティアで道路沿いの木の枝や落ち葉、雑草の手入れをしている。

（2） 住民の生活環境

原発事故以前は、山菜を摘むなど自然環境が近いからこその森林の恵みを享受しながら生活していた。現在では、山の除染ができていないことなどの問題から山に立ち入ることは難しく自然との共存は難しくなっている。

そのような中でも、家の庭や所有地などで花やちょっとした畑を耕しているところも見られた。農地や林地、庭先に、様々な種類の木が植えてあった。家庭菜園をおこなっている家もある。庭に日本ミツバチの巣箱を設置している家も数件あった。

頭ノ巣の家には、昔の養蚕の名残、積雪地域によく見られる急斜面な屋根という特徴があった。古民家を見学させてもらうと、柱と梁は昔のままで立派な大黒柱を見ることができた。住宅の課題として、近年、空き家が目立つようになったことが挙げられる。

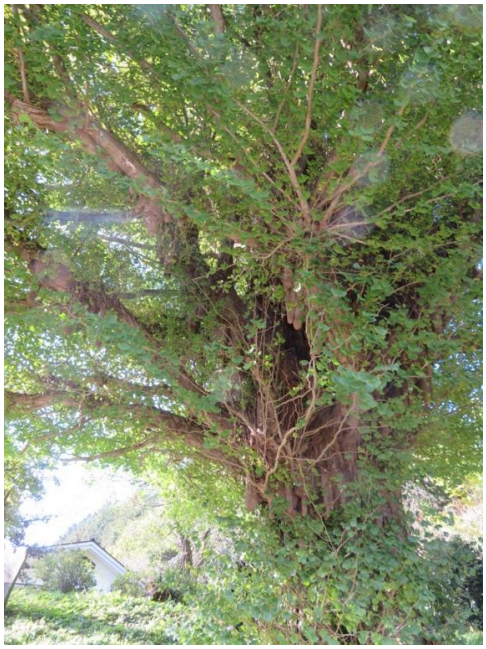
図 3-1 乳イチョウ

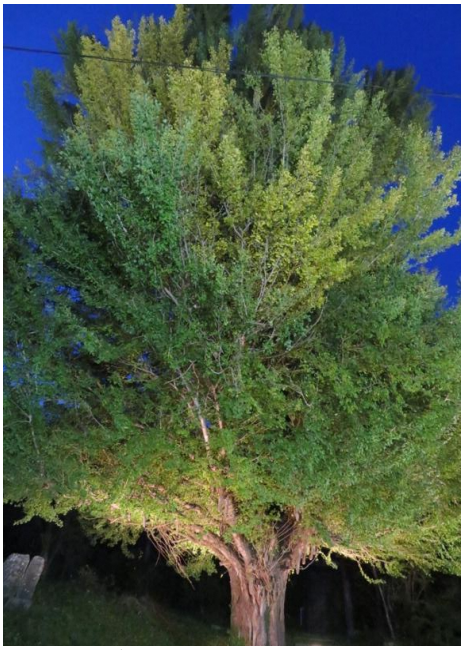
図 3-2 乳イチョウのライトアップ

図 3-3 紅葉した里山

図 3-4 蓮池

図 3-5 耕作放棄地

図 3-6 荒廃した耕作放棄地

図 3-7 古民家をリフォームした家

図 3-8 古民家と庭

図 3-9 集落歩きで見つけた主なポイント

木幡　裕紀

3.　集落の調査結果

3.1 コミュニティ

私たちは、集落の 30~90 代の幅広い年齢の方々に話を聞いた。以下では、戦時中から1980 年代までを昔とし、2000 年以降を現在としてヒアリング記録をもとに整理した。

食について

【昔】

頭ノ巣では、耕作地の多くが傾斜地であり、かつ高冷地であるため晩霜等の被害が生じやすい。米の凶作が続いていたため、白米は貴重で、白いご飯は 1 年のうちに数回しか食べることができなかった。米にカボチャやサツマイモ、ダイコンの葉などの野菜を入れて量を増して食べていた。動物性たんぱく質なども貴重で、卵、魚、うさぎなどは特別な日にしか食べることができなかった。油も貴重で、手に入るのは魚の脂だった。油を使った料理はほとんどなかった。

このような食糧不足の時代に役立ったのが、山の資源であった。アケビ、山ブドウ、ヤマナシ、コクワ、トコロイモ、ムラサキシメジ・クリノキモノダシ・センボンシメジ・ニホンシメジ・イノハナなどのキノコ、ゼンマイ、ワラビ、ウドなどの山菜、野山にある食べられるものは全部、採って食べた。

商店は、都路の中心地、頭ノ巣集会所から 3 ㎞のところにあった。

【現在】

福島原発事故前の 2010 年に、大久保小学校の閉校にともなって、地元の伝統料理を発掘するイベントが行われた。お母さんたちに聞き取りをしてレシピを集めて、実際に、集落の人たちと一緒に作ったそうだ。その様子は地元のテレビに取り上げられた。そこでは、柿餅、キジの吸い物、団子粥などの伝統料理がテーブルにのぼった。

福島原発事故後、放射能汚染の影響で山菜やキノコを、いままでのように自由に採って食べることができなくなってしまったという。

車が普及してからは、住民の生活圏は浜通りにあった。福島原発事故の影響で浜通りの町には商業施設がなくなってしまったため、現在は、車で船引や郡山に買い物に行ったりセブンイレブンの移動販売を利用したりしている。

(1)　祭り、行事、活動について

【昔】

集落の祭りと行事が、住民の交流の場になっていた。祭りには、豊作祈願して二柱神社に奉納する例大祭と、豊作を祝う豊年踊りがある。例大祭は、20 年ほど前までは米の収穫時期にあたる 9 月に 2 日間で実施していた。

例大祭のときの目玉の一つは豊年踊りであった。40 歳以下の男性で構成される祝豊団が、太鼓や獅子舞踊り、ひょっとこ踊りを披露した。

地域の行事には、地区対抗の野球大会や体育祭、カラオケ大会などの活動があった。毎月 1 回は飲み会をしていた。

【現在】

例大祭は、9 月の第 1 日曜日の 1 日間だけ開催している。福島原発事故後は、奉納は実施できなかったが、集まることは継続して、住民全員で大掃除をした。数年前に例大祭を復活させたものの、2020 年は新型コロナウィルスの影響で中止になった。

祝豊団は、若年層の減少にともなって、2003 年に解散をした。

地区対抗の野球大会や体育祭、カラオケ大会、飲み会などの行事は人口減少や市町村合

併にともなって、廃止になった。

(2)　子どもの生活について

【昔】

現在、80~90 代の住民は次のように語った。戦争を経験した方もいて、当時は学校にはほとんど行けず兄弟の面倒を見た。子どもであっても、親の炭焼きの手伝いをしなければならなかった。学校までは 1 時間以上かけて歩いて通学した。その長い通学路を山で焼いた炭を背負って学校まで歩いた。

現在、30~40 代の住民は幼少期を次のように話した。交通手段がなかったので、遊び場は頭ノ巣だった。川に行って魚をつかんだり、山に行ってアケビを採ったりして遊んだ。秘密基地をつくることもあった。雪がふれば、農業に使う肥料袋をもって滑った。地域の人から様々なことを教えてもらい、地域の人たちに育ててもらった。

【現在】

現在は、どこの家も自家用車を持ち、スクールバスも通っているため、昔よりは交通手段が整っている。しかし、頭ノ巣には小学生が 1 人しかいない。子育て世代からすると、子どもが少ないと、遊ぶ人が兄弟などに限られてしまうという懸念がある。それに加えて、昔あったような子どもが地域の住民との関わりを持つ機会がほとんどなくなっているという課題もある。

(3)　結について

【昔】

頭ノ巣集落の住民同士で助け合いながら田植えや稲刈り、結婚式、葬式（自宅葬・土葬）、養蚕、神輿造りなどを共同でおこなう結（ゆい）というものがあった。

葬式は自宅であげることが多かった。自宅葬は、喪主の家族だけではなく、結で住民が協力しておこなう。飾りやお棺は手作りである。木を掘って、色とりどりの飾りをつけた。お棺は家から集落の墓地まで、担いで運んだ。集落の墓地は集会場の向かいにあり、先祖が眠っているところに埋葬される。伝統的に、この集落では土葬である。

結があるときは、朝から晩まで働くので、手伝いを依頼する家が、3 食の他に、朝ごはん前に食べる「朝きぎり」、15 時過ぎにおにぎりを食べる「こじはん」を振る舞った。子どもにとっては、そのときのご飯が楽しみであったという。

【現在】

農業が機械化してからは、作業に人手が必要なくなり、結の機能は低下していった。葬式のときの結も昔のようには、おこなわれなくなった。自宅葬から葬式会場に、土葬から火葬に変わった。

(4)　集落の魅力と課題について

【魅力】

住民同士のつながりが強く、お互いのことを非常によく知っているところが一番の魅力である。他にもこれからの頭ノ巣集落をどうしていくのかを真剣に考えているところ、集落外から来た人たちを温かく迎えてくれるところ、地域に誇りをもって話しているところ、笑顔や話が絶えないところも魅力である。

【課題】

若い世代が少なく、高齢化率が高いことである。福島原発事故後、放射能汚染の影響で近くの町などに住もうと決めた方が多く、後継者不足も課題である。

人の動きだけではなく、放射能汚染の影響によって山のもの、特に山菜やキノコを食べることができなくなった。

買い物をするときは集落外に出ないといけないので不便である。救急車が来るまで 20 分ほどかかり、受け入れ先が決定するまで時間がかかる。

結がなくなり行事や祭りが減ったため、住民同士のかかわりは昔よりも減ってきている。

図 3-1 1 回目の現地調査後の整理（1）

図 3-2 1 回目の現地調査後の整理（2）

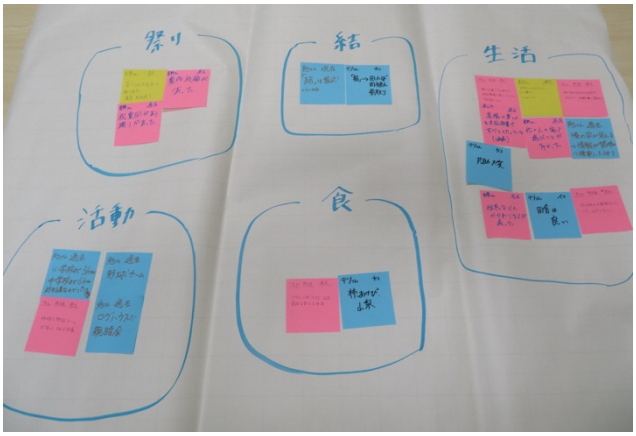

図 3-2 2 回目の現地調査後の整理
（コミュニティづくり班）

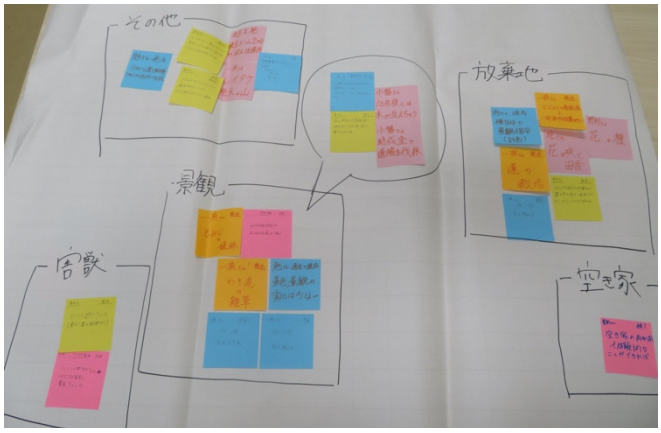

図 3-2 2 回目の現地調査後の整理
（景観づくり班）

渡部　もも

3.2 景観づくり

（1） 土地の利用

【昔】

頭ノ巣は、江戸時代に鍛冶屋で栄えた。天明の飢饉では、浅間山の大爆発により低温多湿の環境条件にさらされ、凶作が続き、都路では多くの死者を出したといわれている。頭ノ巣には、鍛冶屋があったのでなんとか食べていけたという話が言い伝えられている。

明治から昭和にかけては、炭焼きが盛んであった。太平洋戦争により燃料が必要となり、木炭の需要が増えた。窯を大きくして、100 俵くらいにまで増産した。炭焼きは冬の仕事だったので、春から秋の間は、稲作と、畜産あるいは酪農をセットで、複合農業を営んだ。多くの人が農林業に従事していた。水田面積はおよそ 30ha あり、すべて作付けがされていた。

【現在】

若者離れと高齢化が進み、耕作放棄地が増えていたが、福島原発事故によってさらにその面積は増加した。福島原発事故前には、水田を活用してドジョウの養殖をする人もいたが、放射能汚染の影響により断念せざるを得なくなった。福島原発事故後には、水田の作付面積は 15ha にまで減少した。

一方、耕作放棄地の利活用に取り組んでいる農家もいる。ある農家は、トマトなどの有機野菜を作ってブランド化を目指している。

林業では、コナラの木を使って、シイタケ原木を生産していた。しかし、放射能汚染により現在は生産ができなくなっている。

（2） 景観

【昔】

田んぼの風景が広がり、きれいな川が流れる自然豊かな場所であった。

【現在】

福島原発事故後、水田面積およそ 30ha のうち、半数の約 15ha が耕作放棄地に化した。山も手付かずの土地がほとんどである。荒廃していく農地や山に対して、人目に着くところから景観づくりに取り組んでいる。

集落では、道路脇の草木を伐採したりし、景観をよくするための活動を有志で行っている。住民の中には、農地の空いている土地に紅葉の植林をしている住民もいる。

他にも、地元の資源を生かした景観づくりもしている。集落のシンボルであるイチョウの木のライトアップは、ある住民が個人的にはじめた活動であった。私たちが訪問した際には、今回は集落の実行委員会でライトアップをした。

（3） 鳥獣被害

【昔】

炭焼きが盛んだった時代には、山にはうさきなどの小動物しか見かけることがなく、イノシシは見たことがなかったという。

【現在】

福島原発事故前は、イノシシが集落に入ってくることもあったが、農作物に甚大な被害がでるほどではなかった。福島原発事故後は、耕作放棄地が増えたことにより、害獣の数も種類も増えた。そこで、網や電気フェンスを立てた。それらを集落の農地全体に張り巡らせようとしたが、費用がかかり、土手草の管理も大変となることで、それは取りやめ

た。害獣対策はこの集落において大きな課題である。

（4）　家

【昔】

集落の家のほとんどは、茅葺き屋根で造られていた。昔は、結で、茅を育て、茅葺きをした。家は、養蚕小屋と家を兼用できるつくりであった。天井を高くして、2 階を蚕小屋にしていた。通気性をよくするために、屋根の真ん中に突き出している小さな窓がある。

【現在】

現在、古民家は数件ほどしか残っていなく、残っている家でも茅葺き屋根をトタン屋根を敷いている。そうすることで、茅をふき直す必要がなくなるからである。茅葺には 800 万円ほどかかるうえ、材料や職人も不足しているため、茅を剥き出しにして維持することは難しい。

保存されている古民家の中には、断熱の壁や窓をつけて、薪ストーブを入れて、内装を現代風にリフォームしてある家もあった。

人口減少により、空き家が増えてきている。

（5）　集落の魅力と課題について

【魅力】

広大な土地があるということは、大きな魅力となってくる。また、イチョウの木が頭ノ巣のシンボルとなっている。

また、有機野菜を作ってブランド化させようとしていることは、これから頭ノ巣の魅力を発信させていくための一つのツールとなってくると考えられる。

【課題】

耕作放棄地をどのようにしていくかが一番の課題となる。放置していくと、害獣が増えたり雑草が生い茂ったりするなど、さらに悪影響を及ぼしてしまう。広大な土地があることから、良い方向に進めていく方法を探していきたい。

八代　さえ

4. まとめと考察

4.1　コミュニティについて

（1）　ヒアリングを通してみえてきたこと

全体を通し、過去と現在に大きく違いがあると感じた。昔はコミュニティが活気付いていたにも関わらず、今では住民が交流する機会や活動が減少、または消滅してしまっている。このままでは現在ある魅力まで失われてしまうことも憂慮される。

しかし、従来と同じ規模で同じようにコミュニティの機能を再生・維持することは難しい。30~40 代の住民からは、高齢化や人口減少を懸念しており、過去と同様に祭りや行事を行っていくことは厳しいだろうという意見があった。その代替策として、行事などを集落単位ではなく、地区単位で開催すること、そして、昔の行事を継承しつつも時代に沿った行事を取り入れることも必要であるという意見もあった。50 代の住民からも、何か新たな事業を始めたりするのではなく、今あるものを生かし、きれいに村を畳んでいきたいという意見があった。

これらの意見を踏まえて、今後のコミュニティのあり方について議論した際に、結がキーワードになるという結論に至った。結が衰退していくにつれて行事が減り、コミュニティの機能も低下していったと考える。もちろん、人口減少が続き、人々の生活変化しているなかで、従来と同じかたちでは機能しないであろう。全く同じでなくとも、これまで続いてきた行事やコミュニティの機能を、現在の住民ニーズに合わせて新たな行事や活動を加えながら、結を復活させることはできないであろうか。

（2）　学生にできること

どのように結を復活させるか、ここでは、住民の意見を整理して 3 つの対策案を提示した。ただし、これらはあくまで案である。実際には、住民とこれから取り組んでいくことができることを出し合って、話し合っていく必要がある。私たちができることは、住民の意見をしっかり汲み取り、それらを整理して議論の材料をつくっていくことである。そして、実際に取り組むことが決まったら、その手伝いをすることである。

（3）　対策案

①　食について

〈提案内容〉

昔から伝わる郷土料理をこの地域の食材を使って実際に調理し、それを映像に残す。調理方法をレシピとして残す。

〈提案理由〉

福島原発事故前に郷土料理のレシピを集め、集落の女性陣を集めて料理を再現したそうだ。テレビ番組で放送されたその動画を見せてもらった。伝統料理は、地域の生活や文化を表すもので、かつ地域特有のものである。伝統料理をこの地域の歴史および生き方として、後世に継承することは非常に重要であると感じた。

料理は物理的に保存することができないため、映像にして記録することを考えた。またレシピをつくる過程やつくられた後においても、住民が集う機会がつくられるのではないかという期待も込めている。

② 祭りについて
〈提案内容〉
獅子舞踊りやひょっとこ踊りなどを映像に残す。
〈提案理由〉
伝統料理と同様に、映像をつくることで、後世に残すことができると考えた。伝統芸能が途絶えたとしても映像があればいつでも復活できるようになる。また、映像をつくる過程や、その後においても、住民が集い、交流する機会がつくられることも期待できる。

③ コミュニティのつながりについて
〈提案内容〉
月に1度の集会所での飲み会を再びおこなう。
〈提案理由〉
住民が集い、交流する機会が少ないなかで、最も手軽に実施できることからおこなうこととして、飲み会を提案する。頭ノ巣において飲み会がコミュニティの強化に重要な役割を担っていることを、ヒアリングを通して感じた。

図 4-1 頭ノ巣の郷土料理
出所：2011 年 2 月 20 日午前 11 時に放映された KFB 福島放送の番組より

佐藤　駿

4.2 景観づくり

(1) ヒアリングを通して見えてきたこと

二回の調査を通して 2 つのことが見えてきた。第一に、住民の大部分は共通して景観をより良くしたいという気持ちを持っていることである。景観をより良くする解決策として、住民からはさまざまな意見があがった。害獣による土地の荒らしの被害を少なくすることや、年々増加している空き家を古民家カフェにすること、耕作放棄地を有効に利用することなどが挙げられた。

しかしながら、先の 2 つの対策については、現実的ではないと考えている。鳥獣対策については、電気フェンスを設置しても時間がたつにつれ効果が無くなりその意味をなさなくなるし、それに加え景観も設置した分悪くなってしまう。空き家を古民家カフェにするという案についても、実際にリフォームし営業するまでに莫大な費用がかかるし、頭ノ巣は交通の便が悪いため集客を期待できないという問題がある。

他方で、耕作放棄地の利用については現在すでに実践されており、頭ノ巣集落の景観をより良くするために有効で現実的な策であると考える。蓮の池をつくったり、脇道に紅葉を植えたりして、景観をより良くするために尽力している住民がいる。これらは主に個人でおこなわれている取り組みである。このような取り組みに集落の住民が協力して範囲を拡大していくことで、景観をより良くすることができるのではないかと考える。

また、ある住民から、より広範囲の耕作放棄地の利用について提案があった。それは「種団子を撒くこと」である。その種には「グランドカバープランツ」を用いる。この植物は雑草が生えているところでも自生することができ雑草防止にも役に立つ。多年草のものなので、手入れをする必要ないため、人口の少ない頭ノ巣であっても、一度撒くことで景観をより良くすることができる。

第二に、頭ノ巣における地域づくりの視点が「集落を畳む」ということにあることだ。頭ノ巣では少子高齢化が進み、いずれ頭ノ巣に人がいなくなるのではないかと考えている住民がいる。こうした背景から「集落を畳む」という言葉が出てきた。使わなくなった農地を荒廃させておかずに、人の手がいらないように自然に還して、景観をよくしていくという考え方である。先祖が景観を保全してくれたように、自分も土地を荒らさずに同じように綺麗にするという気持ちが込められている。その考え方において景観は、新たにつくるというよりも、いまある景観を良いかたちで保存するということを意味している。

将来を担う 30 代の住民もまた、自分たちが子どもの時のような田園風景をつくり、耕作放棄地をゼロにしたいという想いを抱いている。その想いには、これまで自分たちを育ててくれた地域の先輩世代に対する敬意や感謝も込められている。今まで頭ノ巣を支えてきた祖父母世代、親世代が、この集落に住んでいて良かったと思えるような美しい景観をつくり、最後を見送りたいという。

ふらっと通った人や訪れた人が見て嬉しい、目に留まるような景観にしたいということが現地の方々の一番の願いである。下の写真はその理想の絵として、住民が依頼して田村市在住建築士の佐藤孝氏が描いたものである。

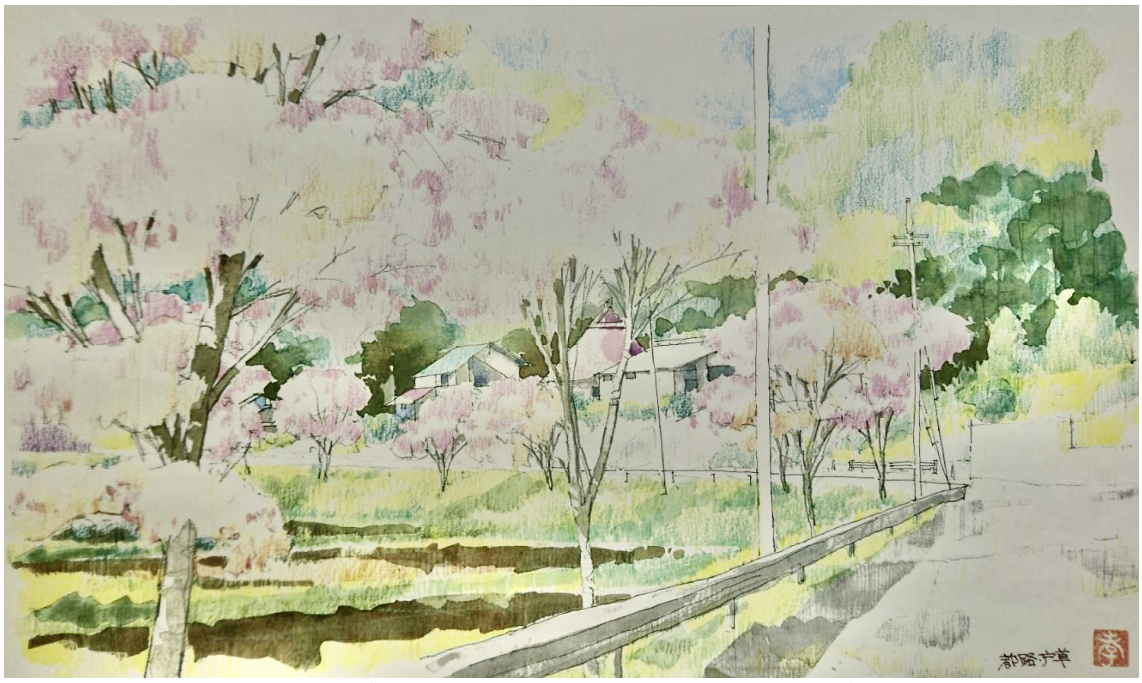

図 4-2 頭ノ巣のイメージ図（春を賑わす水田の畦道に広がる桜並木）
出所：佐藤孝氏の作品を撮影したもの。

図 4-3 頭ノ巣のイメージ図（疲れを癒す緑豊かな里山と池を囲む花畑）
出所：同上

図 4-4 頭ノ巣のイメージ図（秋を彩る広葉樹）
出所：同上

（2）　自分たち学生にできること

頭ノ巣の景観をより良くするためには、ゼロから大きなものを生み出すことではなく、すでにあるものを利用したり、すでにおこなっていることを広げたり、さほど手間をかけずに少人数で継続的に作業することができる取り組みをすることであることを教えられた。私たち学生ができることの一つは、住民の作業の手伝いである。たとえば、「種団子」を撒くということだ。すでに取り組まれている紅葉の植林には率先して協力していきたい。そして、もう一つは、「集落を畳む」具体的な方法を住民とともに考え、活動することである。住民の意見をしっかりまとめていくことに加えて、私たちからも意見を出せるように、耕作放棄地の有効利用に焦点をあてて文献調査をおこなっていきたい。

橋本　龍太郎

おわりに

現地調査をおこなう前と後で、頭ノ巣に対する私たちの考えは大きく変わった。

現地調査前は、正直なところ「田舎に都会のような魅力があるのか、本当にこの地域で魅力、課題の発見が出来るのだろうか」という考えが強かった。都路や頭ノ巣については、ゼミの先輩たちや指導教員から教わり、自分たちでも新聞やインターネットで調べていた。放射能汚染という大きな障壁があるなかで、私たちにできることはあるのかという懸念を抱いていた。

しかし、実際に現地に行くと、考えが変わった。頭ノ巣では多くの魅力を発見することができた。田舎は、都会になることができなかった地域でなく、都会とは全く異なる魅力を有した地域であることに気がつかされた。また、調査前は見えてこなかった地域の課題についても、見聞きすることで段々と把握することができた。

現地調査を通じて体得できたことが 3 つある。第一に、直接住民の方々から話を聞くことは、文献などよりも多くの情報を得ることができ、理解が深まることである。たとえば、頭ノ巣における住民同士のつながりの強さを、ヒアリングのなかで実感した。「田舎は都会よりも近隣同士のネットワークが強い」ということを事前に文献で読んでいたが、頭ノ巣では、想像よりも遥かに強いネットワークが存在した。

第二に、実際に自分の目で見ることの大切さである。耕作放棄地や、イノシシの足跡、イノシシ対策の電気フェンスなどは、直接見ることで、文章で調べるよりも多くの課題を発見するこができた。また、現実を直視し、調査前よりも事態を深刻に受け入れることができるようになった。

第三に、ヒアリングのスキルを身につけることの重要性である。どんな小さなことでもたずねることで会話が生まれ、会話がさらに新たな話題を生む。これにより一方的に話を聞くよりも多くのことを知ることができる。ヒアリングには聞く力のみならず、会話のキャッチボールをするスキルが必要となる。加えて、その会話から問題の本質を捉えることも重要である。今後、調査を通じて、自らのスキルを向上させていきたい。

来年度以降も、私たちはコミュニティづくりと景観づくりの 2 つのテーマについて研究をしていく。当面の課題は次の点である。

コミュニティづくりでは、結を復活させる方法や、具体的な活動についてまだ固まっていない。今後、私たちは、頭ノ巣と同じ課題を抱えコミュニティを再生した事例などを調べていきたい。住民の方々が必要としている情報を提供し、具体的な方法や活動内容について一緒に考えていきたい。

景観づくりでは、方向性は固まりつつあるが、具体的な方法は決まっていない。頭ノ巣の土地の特性や気候、人々の暮らしなど、地域を取り巻く環境を調べ、その環境に適した方策を見つけていく必要がある。同時に、資金や時間、必要な人員なども考慮して景観づくりをしていくことが重要である。私たちは、今後も頭ノ巣に通って地域の環境について調査するとともに、景観づくりの成功事例を調べて、有効な方法について住民の方々とともに考えていきたい。

最後に、本調査の実施に当たってご協力をいただいた田村市都路町、頭ノ巣集落の皆様に、心より感謝を申し上げたい。今後とも一層のご教示をよろしくお願いいたします。

岡崎　瑠威

田村市都路町頭ノ巣集落
調査報告書

発行日：2021年3月

編集：福島大学経済経営学類　藤原遥ゼミナール